

柏木教会月報

11月号

東京都新宿区北新宿 3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

絶えず祈る

ルカによる福音書一八章一〜八節

牧師 大浦 勝

「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」(七節)

神は十戒の第一戒で、「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」と命じておられる(出エジプト二〇・三)。神はこの戒めによってわたしたちに、まことの神以外の何ものに向かつて祈ることも禁じ、このお方からだけすべての良いものを期待すべきことを命じておられる。従つて、この戒めはわたしたちに、どんな時にもこのお方に向かつて祈るべきことを同時に教えている。第一戒をお与えになった神は、どんな時にもわたしたちの神でいて下さるし、神のいつくしみとあわれみの及ばない所はないからである。

キリストは一つのたとえをもつて、「気を落とさず絶えず祈らなければならないこと」をお教えになる(一節)。祈りは信仰者の呼吸である。み言葉によってわたしたちに語りかけて下さる神に、わたしたちは祈りをもつてお答えする。神とのこの生きた関係を持ち続けていなければ、わたしたちのキリスト者としての歩みはおぼつかないものとなる。「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」とお命じになった神は、どんな時に

もわたしたちの祈りに耳を傾けていて下さるし、祈りを聞き届けようと待ちかまえていて下さる。

たとえに登場する裁判官は、やもめの訴えを取り上げようとはしなかった。やもめの訴えは恐らく正当なものであったのであろうが、それが正当な訴えであることが、この裁判官の心を動かしたのではなかった。彼はひっきりなしに自分の所へ来て訴える彼女の執拗さに悩まされて、ついに彼女のために裁判をおこなうことにする。

神はこの裁判官のようなお方ではない。わたしたちの祈りを喜び、受け入れ、聞き届けて下さる。わたしたちは祈りはなかなか聞かれなれないと思つている。しかし、神はまどろむことなく、眠ることなくわたしたちを見守つていて下さり(詩一二一・四)、祈りにおいて、わたしたちをご自分との生きた交わりに招き入れて下さる。わたしたちは「気を落とさず絶えず祈る」ことによって、神との生きた交わりの中を生きる。

わたしたちは「食べたり飲んだり、買つたり売つたり、植えたり建てたり」の日常の歩みをしているが(ルカ一七・二八)、その日常の中に埋没してしまふことなく、「絶えず祈る」ことによって、神の国到来の希望を持ち続けなければならない。この希望が失われるとき、キリストに仕える熱心さも忠実さも失われる。キリストはご自分が再びお出でになるとき、「果たして地上に信仰を見いだすだろうか」と危惧を言い表しておられる(八節)。これは地上を信仰者として歩むわたしたちに対する警告である。わたしたちは「絶えず祈る」ことによって、この信仰に生き、この希望の中を生きる。